

# 日本書紀の成りたちを考える

——仏教関係の記述をめぐって、その一——

榎 本 福 寿

- 一、はじめに——小稿のねらい——
- 二、Ⅱ群とⅢ群との対立——「宮中」と「内裏」などの非仏教語の場合——
- 三、Ⅱ群とⅢ群との対立——僧侶をあらわす語やそれによる表現の場合——
- 四、Ⅱ群とⅢ群との対立——読経や講経などの仏教儀礼の場合——
- 五、おわりに——続稿へのはしわたし——

## 一、はじめに

——小稿のねらい——

日本書紀の編纂を企てたそのそもそものはじめから、日本の正史を記述することがその目的であったはずであるから、内容のいかんを問わず、漢文体、それも中国史書のそれに比肩しうる漢文体を採用することは、当然の了解事項

日本書紀の成りたちを考える

であつたに相違ない。實際に、出典をもつ辞句はおびただしい数にのぼる。また、それらはいささかも狹雜的ではない。表現の限りでいえば、中国の史書に見劣りしないばかりか、漢籍の辞句を利用する場合に、その原文を對表現に改めるなどの、細心かつ積極的な姿勢さえみせる。

けれども、書紀全体を通して、そうした姿勢は一貫していない。なかには、漢籍の辞句の利用がはなはだ低調である上に、漢文の体裁をとりながら、その実、日本語をもとにそれに対応する正訓字を使ってあらわす、いわゆる正訓字表記を基調とする巻などもある。これらの巻にあつては、漢文の格にあわない和習（和習）の例が少なくない。

こうして巻ごとに区々ではあるけれども、それでも、表現を成り立たせるその基調の違いによつて、書紀三〇巻は二つないし三つのグループに系列化できるというのが、前稿までに得た結論のあらましである。註1この稿では、それらの旧稿をうけて、表現の基調が違えば、そこにおのずから予想される内容上の異なりについて考える。しかし、異なりそれ自体を主眼とするのではない。各グループのそれぞれ独自の表現と内容との相関、もう少し敷衍していえば、漢語・漢文や日本語・正訓字などによる、それぞれ各グループが基調とする表現は内容とも深いかわりがあつたはずで、その各グループごとの特質を見きわめようとする点に、そもそのねらいがある。

しかしながら、表現と内容とのかかわり一般を、ましてやそれをはじめから包括的に検討してみても、それほど多くの成果は期待できない。なによりも、検討を進めるその方法自体が問題となるであろう。そこで、まず内容について、その特徴をグループごとに見定めようと思う。内容の限りでも、書紀の史書という性格にともなう、たとえば巻ごとにそのあらわす内容が違ふことは勿論、内容それ自体が歴史であるために、それらを一括しえないなどの問題はあるけれども、ここでは、ひとまず便宜に従い、比較的まとまって取りだしやすく、また資料的にも豊富な仏教関係

の記述を取りあげ、それらを通してグループごとの特徴を探ることにする。前稿までに系列化できた各グループの名称と所屬卷は、次のとおりである。

I 群 卷一・二

II 群 卷三・二一・二二・二三・二八・二九

III 群 卷一四・二一・二四・二七・三〇

二、II 群とIII 群との対立

——「宮中」と「内裏」などの非仏教語の場合——

仏教関係記述といっても、他の記述とは無縁に、それだけが別個にあるわけではない。素材的には、書紀を成りたせるいく多の歴史資料のなかの一つでしかなく、内容の上で、仏教に関連する伝承や行事・儀礼のほか、広義には、仏・法・僧のいづれかがかかわる事柄についての記述を一括した、どこまでも仮りの呼称に過ぎない。それらは、書紀の記述一般ともより別ではない。そうして、一般の記述がそうであるように、群ごとにそのあらわれを異にする。

II 群——宮中

。是日、始説<sub>2</sub>金光明經于宮中及諸寺。(二九・353)

。是夏、始請<sub>2</sub>僧尼、安<sub>2</sub>居于宮中。(同・368)

。丁酉、設<sub>二</sub>齋于宮中<sub>一</sub>。(同・372)

。庚寅、始請<sub>二</sub>僧尼<sub>一</sub>、安<sub>二</sub>居于宮中<sub>一</sub>。(同・377)

。是月、說<sub>二</sub>金剛般若經於宮中<sub>一</sub>。(同・380)

。癸亥、天皇、体不安。因以於<sub>二</sub>川原寺<sub>一</sub>、說<sub>二</sub>藥師經<sub>一</sub>。安<sub>二</sub>居于宮中<sub>一</sub>。(同・383)

。是日、僧正僧都等、参<sub>二</sub>赴宮中<sub>一</sub>而悔過矣。(同・384)

。丙午、請<sub>二</sub>一百僧<sub>一</sub>、誦<sub>二</sub>金光明經於宮中<sub>一</sub>。(同・385)

。丙寅、選<sub>二</sub>淨行者七十人<sub>一</sub>以出家。乃設<sub>二</sub>齋於宮中御窟院<sub>一</sub>。(同・385)

。庚午、度<sub>二</sub>僧尼并一百<sub>一</sub>。因以坐<sub>二</sub>百菩薩於宮中<sub>一</sub>、誦<sub>二</sub>觀世音經二百卷<sub>一</sub>。(同・385)

### III 群——内裏

。於<sub>レ</sub>是、皇弟皇子、引<sub>二</sub>豐國法師<sub>一</sub>闕名也、入<sub>二</sub>於内裏<sub>一</sub>。(二一・123)

。夏四月戊子朔壬寅、請<sub>二</sub>沙門惠隱於内裏<sub>一</sub>、使<sub>レ</sub>講<sub>二</sub>無量壽經<sub>一</sub>。(二五・252)

。冬十二月晦、請<sub>二</sub>天下僧尼於内裏<sub>一</sub>、設<sub>レ</sub>齋大捨燃燈。(同・383)

。辛未、於<sub>二</sub>内裏<sub>一</sub>、開<sub>二</sub>百佛眼<sub>一</sub>。(二七・300)

。東宮起而再拜、便向<sub>二</sub>於内裏佛殿之南<sub>一</sub>、踞<sub>二</sub>坐胡床<sub>一</sub>、剃<sub>二</sub>除鬢髮<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>沙門<sub>一</sub>。(同・300)

。丙辰、大友皇子、在<sub>二</sub>於内裏西殿織佛像前<sub>一</sub>。(同・301)

。丙寅、設<sub>二</sub>齋於内裏<sub>一</sub>。(三〇・404)

。庚寅、於<sub>二</sub>内裏<sub>一</sub>、始安居講說。(同・405)

。癸卯、設<sub>二</sub>無遮大会於内裏<sub>一</sub>。(同・419)

。丙申、為<sub>二</sub>清御原天皇、設<sub>二</sub>無遮大会於内裏<sub>一</sub>。(同・420)

仏教關係記述のなかの、右に挙げたとおり多くを占める仏教儀礼に關した用例のほか、二三のそれ以外の用例も併せて、全てが、Ⅱ群では「宮中」、一方のⅢ群では「内裏」というように、互いに排他的かつ一貫したあらわれをみせる。

もっとも、Ⅱ群の「宮中」は卷二九にしかない。Ⅲ群の「内裏」がいくつかの卷にあらわれるのとは対照的であるが、しかし、その対立が、おのおのの群の、それぞれ「宮中」「内裏」のいずれか一方を専用する基調によることは著しい。實際に、仏教關係の記述というわくを外して「宮中」「内裏」の全用例を取り出してみると、次の表に示すとおり、あきらかに群相互の対立といったあらわれをみせる。

表中の数字にそくして改めていえば、群ごとに、それぞれ「宮中」「内裏」を一方的に専用していたことをそれは如実に物語るであろう。仏教關係の記述の、そのⅡ群とⅢ群とのそれぞれ「宮中」と「内裏」との対立は、こうして群相互に一方を専用していたまさにその結果にほかならない。

群	内裏	宮中	卷
Ⅱ		1	八
		1	一一
		1	一二
		3	一三
Ⅲ	1		一四
	2		二一
	3		二五
	4		二七
Ⅱ		12	二九
Ⅲ	8		三〇

ただし、「宮中」に限っては、ほかに卷一五に二例、卷二四に一例ある。この三例だけは、表にあらわしていない。というのも、Ⅲ群にとつて、それらは異例というほかになく、そのいずれもが特別な事由を伴うからである。卷一五の例は、二つとも出典をもつ文中にある。

。使<sub>下</sub>臣連持<sub>レ</sub>節、以<sub>三</sub>王青蓋車<sub>一</sub>、迎<sub>入</sub>宮中<sub>中</sub>。(一五・399・404)

。使<sub>下</sub>寶武持<sub>レ</sub>節、以<sub>三</sub>王青蓋車<sub>一</sub>、迎<sub>入</sub>殿中<sub>中</sub>。(後漢書卷八・孝靈帝紀)

右のように後漢書の一節を二度にわたって全く同様に利用したなかの、いずれも「殿中」の言い換えである。後漢書には、ほかに、皇帝となる者を迎えるといった同じ内容を伝える孝安帝紀(卷五)の一節にも「使<sub>下</sub>鸞持<sub>レ</sub>節、以<sub>三</sub>王青蓋車<sub>一</sub>迎<sub>帝</sub>、齋<sub>三</sub>千殿中<sub>一</sub>。」とある。「殿中」は、かくて皇帝となる者を迎える特定の場所をあらわすが、くだんの卷一五の一節では、その全体を後漢書の例に倣う一方、そうして特に場所を限定するまでもなかったために、内容的にそれに近い語で、しかも構成の上でもあい似た「宮中」に改めたのであろう。一方、卷二四の一例は、「或人」が「謡歌」について説明したことばのうちにある。

説<sub>三</sub>第三謡歌<sub>一</sub>曰、其歌所謂「をばやしにわれをひき<sub>引</sub>入<sub>入</sub>てせし<sub>引</sub>ひとのおもてもし<sub>知</sub>らずいへもし<sub>知</sub>らずも」(以上、原

文音仮名)也、此即、入鹿臣、忽於<sub>三</sub>宮中<sub>一</sub>、為<sub>三</sub>佐伯連子麻呂・稚犬養連網田所<sub>一</sub>誅之兆也。(二四・211)

入鹿が誅殺されるという事件発生のはば一年前、すなわち皇極天皇三年六月に「于<sub>レ</sub>時、有<sub>三</sub>謡歌三首<sub>一</sub>」としてうたわれた歌を、事件後に、その予兆として解釈したものである。もともと「或人」の説に過ぎず、歌を事件に付会することがそのねらいであるから、歌詞にいう「小林に我を引き入れて」との対応上、宮廷のなかという「宮中」がふさわしいために、それを使用したのであろう。ちなみに、事件の記録では、その現場を「大極殿」と伝える(皇極天皇

四年六月条。

こうしてⅢ群が使用した三例の「宮中」のうち、二例が出典をもつ文中にあって、その依拠した原文の語を応用したものの、残る一例が「謡歌」になぞらえて使用したもので、いずれも相応の事由による。なおまた「宮中」に類義的な「禁中」の使用も、やはり限定を伴う。Ⅲ群に二例あるが、双方とも「定策禁中」(一五・404、三〇・428)とあり、後継天皇を決めるはかりごとをめぐらすという場合に限って使う。それが、後漢書に出典をもつ「宮中」の使用と同じように、後継皇帝を決めるという場合の、それをあらわす後漢書の類型的な表現(卷五孝安帝紀・卷七孝桓帝紀・卷八孝靈帝紀など。卷一五の例は、その最後の例による)に倣い、しかもその使用をそれだけにことさら限定していた結果であることは疑いを容れない。「宮中」「禁中」のいずれにせよ、Ⅲ群は、その使用をあきらかに限定し、そうして控えている。ひっきょう、それは「内裏」を常用語に持ち、その使用にもっぱら徹していたからにほかならない。仏教関係の記述でも、それがⅢ群にある以上は、Ⅲ群における「内裏」の、その徹底した使用の一環として、あるいはそれに付随して、「内裏」の専用は、むしろ必然であつたろう。

一方、Ⅱ群は「宮中」を専用する。それだけでもⅢ群と著しく違うが、ほかに、Ⅱ群にもある「禁中」のその使い方、Ⅲ群のそれとは異なる。

皇后懷妊開胎之日、巡行禁中、監察諸司。(二二・136)

右の例は、聖德太子降誕の直前までその生母が巡行していたところをいい、「宮中」との違いはほとんどない。漢籍中の用例に倣い、その使用をことさら限定していたⅢ群の例とは、まさに異質というはかない。

Ⅱ群とⅢ群とは、かくして、たがいに異なる語を、それぞれその群の内部をとおして一貫して使っている。同じ語にしても、群相互に、その使い方を異にする。どこまでも群を一つのまとまった単位とし、それが相互に異なる一方、その内部においては、仏教関係の記述と他の記述との別はない。言い換えれば、仏教関係の記述は群一般の記述にそのままつながり、その群相互の違いもまた、群一般の記述の異なりに付随するということにほかならない。その意味では、仏教関係の記述は、各群それぞれに、まさに記述一般の縮図といっても過言ではない。

「宮中」と「内裏」とは、そのことをあらわす端的な例であったが、類例は、もとより少なくない。次には、寺院の建造をあらわす語について検討を試みる。まずその全用例を群ごとに示す。

## Ⅱ群

- 。是歳、始造<sub>二</sub>四天王寺於難波荒陵<sub>一</sub>。(二二・136)
- 。諸臣連等、各為<sub>二</sub>君親之恩<sub>一</sub>、競造<sub>二</sub>佛舎<sub>一</sub>。即是謂<sub>レ</sub>寺焉。(同・137)
- 。法興寺造竟。(同・137)
- 。便受<sub>二</sub>佛像<sub>一</sub>、因以造<sub>二</sub>蜂岡寺<sub>一</sub>。(同・141)
- 。朕欲興<sub>二</sub>隆内典<sub>一</sub>、方將<sub>レ</sub>建<sub>二</sub>佛刹<sub>一</sub>。(同・147)
- 。鳥以<sub>二</sub>此田<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>天皇<sub>一</sub>、作<sub>二</sub>金剛寺<sub>一</sub>。(同・147)
- 。今年、造<sub>二</sub>大宮及大寺<sub>一</sub>。是以、西民造<sub>レ</sub>宮、東民作<sub>レ</sub>寺。(二三・184)
- 。是月、於<sub>二</sub>百濟川側<sub>一</sub>、建<sub>二</sub>九重塔<sub>一</sub>。(同・185)
- 。皇后体不予。則為<sub>二</sub>皇后誓願之<sub>一</sub>、初興<sub>二</sub>薬師寺<sub>一</sub>。(二九・355)



### III 群

- 。淨<sub>ニ</sub>捨向原家<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>寺。(一九・78)
- 。經<sub>ニ</sub>營佛殿於宅東方<sub>一</sub>、安<sub>ニ</sub>置弥勒石像<sub>一</sub>。(二〇・113)
- 。亦於<sub>ニ</sub>石川宅<sub>一</sub>、修<sub>ニ</sub>治佛殿<sub>一</sub>。(同・113)
- 。起<sub>ニ</sub>塔於大野丘北<sub>一</sub>、大会設齋。(同・114)
- 。新宮<sub>ニ</sub>精舍<sub>一</sub>、迎入供養。(同・115)
- 。又奉<sub>レ</sub>造<sub>ニ</sub>丈六佛像及寺<sub>一</sub>。(二二・124)
- 。必當<sub>下</sub>奉<sub>ニ</sub>為護世四王<sub>一</sub>、起<sub>ニ</sub>立寺塔<sub>一</sub>。(同・126)
- 。願當<sub>下</sub>奉<sub>ニ</sub>為諸天与大神王<sub>一</sub>、起<sub>ニ</sub>立寺塔<sub>一</sub>、流通<sub>ニ</sub>三宝<sub>一</sub>。(同・126)
- 。於<sub>ニ</sub>摂津国<sub>一</sub>、造<sub>ニ</sub>四天王寺<sub>一</sub>。亦於<sub>ニ</sub>飛鳥地<sub>一</sub>、起<sub>ニ</sub>法興寺<sub>一</sub>。(同・127)
- 。壞<sub>ニ</sub>飛鳥衣縫造祖樹葉之家<sub>一</sub>、始作<sub>ニ</sub>法興寺<sub>一</sub>。(同・130)
- 。是月、起<sub>ニ</sub>大法興寺佛堂与<sub>ニ</sub>步廊<sub>一</sub>。(同・132)
- 。朕思<sub>ニ</sub>欲起<sub>ニ</sub>造大寺<sub>一</sub>。(二四・193)
- 。大臣使<sub>下</sub>長直於<sub>ニ</sub>大丹穗山<sub>一</sub>、造<sub>ニ</sub>梓削寺<sub>一</sub>。(同・206)
- 。凡自<sub>ニ</sub>天皇<sub>一</sub>、至<sub>ニ</sub>于伴造<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>造之寺、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>營者、朕皆助作。(二五・222)
- 。先<sub>レ</sub>是、在<sub>ニ</sub>倭、營<sub>ニ</sub>造其寺<sub>一</sub>。(同・244)
- 。凡此伽藍者、元非<sub>ニ</sub>自身故造<sub>一</sub>。奉<sub>ニ</sub>為天皇、誓作<sub>一</sub>。(同・245)

。昔高麗、欲營伽藍、遂於此地、營造伽藍。(同・248)

右の諸例をもとに、比較の便宜上、兩群ともにある「造」「作」を除き、各群に独自の用例だけを取り出し、それらを群ごとに表にして示すと、次の結果を得る。

語	群	
	II	III
建・興		經營・修治・起立・起造・營造・起・營・(為)

II群とIII群とでは、表のとおり大きな違いがある。そのあらわれをもとに、群ごとの特徴についていえば、すなわち、II群はもっぱら單語を使う。そこに「造作大宮及大寺」(二三・184)だけが異例となるけれども、この熟語の例は、対格に「大宮」「大寺」というあい異なる二つの語を立てる上で、それとの対応を考慮した特別な用字である。これに続いて「大宮」と「大寺」との造作をおのの別個にいう場合には、「西民造宮、東民作寺」といい、單語の使用に戻る。かく委細にみれば、その「造作」も、II群に顯著な單語使用の基調を破るものではない。一方、III群は、一見してあきらかなとおり、熟語の使用に特徴をもつ。

そうしてII群とIII群との、右に掲出したそれぞれ独自の語は、仏教關係の記述にとどまらず、その枠をこえ、おのの群の記述一般にわたってひろく散見する。たとえばII群に独自の「興」をみるに、その造営をあらわす用例は、次のように記述一般をおしてさまざまなかたち(対格に立つ語の異なりをいう)をとってあらわれる。

興齋宮于五十鈴川上(六・185) 興行宮而居(七・203) 興宮室于穴門而居之(八・234) 興山陵於赤石

(九・250) 興宮室 (一一・293) 皇太子始興宮室于斑鳩 (二二・139)

右は一部に過ぎないが、Ⅱ群の、さきに挙例した仏教関係の記述にある「初興藥師寺」も、こうしたⅡ群の記述一般にあらわれる「興」の一例にはかならない。また一方、Ⅲ群は熟語の使用に特徴をもつが、そのうちの「修治佛殿」は「修治宮殿」(二五・223)あるいは「修造宮家、那津之口」(一八・45)と、また「朕思欲起造大寺」は「造起双陵」(二五・408)や「造起宮闕」(二六・262)などと、それぞれあきらかに呼応する。

右のように、寺院などの建造をあらわす場合でも、それに使用する語に、Ⅱ群とⅢ群とは著しい違いがある。その違いは、さきに取りあげた「宮中」「内裏」にも通じる。要するに、Ⅱ群とⅢ群とは、相互に、それぞれ独自の語を使用し、その表現を成りたせていたということにはかならない。なおまた、そこに、仏教関係の記述とそれ以外の別はない。各群の内部では、仏教関係の記述も、いわば全体のなかの部分として、それぞれの記述一般につながるあらわれをみせるというのが、その実態である。

各群の記述が、仏教に関係する与否との別なく、かくて一様に成りたっている以上、語の使用そのことにおいて、仏教語とそれ以外の語との違いは、もちろん無いとみるべきであろう。これまで、いずれも仏教とは無縁の語を取りあげたけれども、仏教語にしても、それをⅡ群とⅢ群とがおのおの独自の使用しているであろうことは、おのずから見通しうる。それが、実際にどのようにあらわれるのか。次には、仏教語にそくして、それによる表現やそのあらわれなどについて検討を試みる。

### 三、Ⅱ群とⅢ群との対立

——僧侶をあらわす語や、それによる表現の場合——

まず始めに、僧侶をあらわす語とその表現についてみるに、共通するもの、たとえば、渡来僧である場合にその出身国名を冠する「百済僧觀勒來之。」(二二・140)、また僧名の上に「僧」を付加する「高麗王貢僧惠灌。」(二二・166)、さらには学問僧という「是時、学問僧靈雲・僧旻及勝鳥養・新羅送使等從之。」(二三・181)などがある一方で、群ごとにそれぞれ独自の表現をもつ。

Ⅱ群に独自の表現には、僧名の下に「僧」を付加させた例がある。左に示すが、その全てである。

- 。於是、百済觀勒僧、表上以言、(二二・164)
- 。以觀勒僧、為僧正。(二二・165)
- 。於是、僧旻僧曰、(二二・183)
- 。因以、請惠隱僧、令説无量寿經。(二三・185)
- 。時、知事福林僧、由老辭知事。(二九・334)
- 。以義成僧、為小僧都。(二九・334)
- 。飛鳥寺弘聡僧終。(二九・354)

。遣<sub>二</sub>草壁皇子<sub>一</sub>、訊<sub>二</sub>惠妙僧<sub>注</sub>之病<sub>三</sub>。明日、惠妙僧終。(二九・355)

。法忍僧・義照僧、為<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>老、各封<sub>二</sub>卅戶<sub>一</sub>。(二九・384)

該当する例は、右のように卷二・二三・二九のいずれもⅡ群に所属する巻にしかない。そのあらわれは比較的偏りなく、数も少なくない。Ⅱ群が、そうして「僧」を使って僧侶をあらわす表現を基本の一つとしていたことは疑いを容れない。

ところで、一方のⅢ群では、僧侶であることをあらわす場合に、たとえば「請<sub>二</sub>沙門<sub>一</sub>惠隱於内裏」(二五・252)のように「沙門」を使う。しかもその方がむしろ一般的であって、それを一切使わないⅡ群とは、際立った違いがある。各巻でのそのあらわれを数字で示すと、左の表のとおりである。

なお付言するに、天武天皇を通常は僧とみなさないけれども、Ⅲ群の記述によれば、天皇が僧侶であることは紛れもない。

。剃<sub>二</sub>除鬘髮<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>沙門<sub>一</sub>。(天智天皇十年十月条、二七・300)

。十年十月、(持統天皇)從<sub>二</sub>沙門<sub>一</sub>天淳<sub>天武</sub>中原瀛真人天皇、入<sub>二</sub>於吉野<sub>一</sub>、避<sub>二</sub>朝猜忌<sub>一</sub>。(持統天皇称制前紀、三〇・391)

右のように、天智紀と持統紀との記述は彼此照応し、いずれもⅢ群に特徴的な「沙門」を使う。一方のⅡ群には、天武紀の上・下ともに、天皇を「沙門」とした例がない。

巻	のべ総数
二五	7
二六	5
二七	6
三〇	19

さて、「沙門」を頻用するなかにあって、それとはまた別に、Ⅲ群では、僧の名に下接させて「法師」を使う。そうして「法師」を使用した僧のうちには、

別以<sub>三</sub>惠妙法師、為<sub>三</sub>百済寺々主。(二五・222)

右のように百済寺の寺主となった惠妙法師がいる。この僧は、後に、Ⅱ群(天武天皇九年十一月条)に「遣<sub>三</sub>草壁皇子、訊<sub>三</sub>惠妙僧之病。明日、惠妙僧終。」(二九・355)と伝える「惠妙僧」その人であろうが、Ⅱ群とⅢ群とのそのあらかわし方の違いは、たとえば「僧」と「法師」とを同語をあらわす異字として使う万葉集注4のそれではない。Ⅲ群にあっては、前述の通り、僧侶をあらわす場合に通常「沙門」を使う。その通例にかんがみても、「法師」の使用には、別になんらかの意図があったとみるべきであろう。

実際、各用例を逐一あたってみると、「法師」は、「沙門」とはあきらかに違う。さきに挙例した惠妙法師が百済寺の寺主となったほか、旻法師は国博士となり(二五・217)、その病臥および死去に際して天皇はじめ皇祖母尊や皇太子などから特別な待遇を受けている(同・254)。あるいはまた道登法師にしても、惠妙法師・旻法師と同じく十師に任ぜられ、改元のきっかけとなった白雉貢献に際しては、旻法師ともども、その休祥の意義について外国の例を引いて奏聞している(二五・248)。

いずれも天皇の厚い信任を得た、いわば高德の僧ばかりであるが、巻二五には、十師の一人としてさらに「沙門<sub>注5</sub>狛大法師」(二五・222)を伝える。このほか、巻二五以外では、巻二六に「沙門智通・智達奉<sub>レ</sub>勅、乘<sub>三</sub>新羅船、往<sub>三</sub>大唐国、受<sub>三</sub>無性衆生義於玄奘法師所。」(二六・266)という、日本にもその名の知られた玄奘法師、また巻二一には、崇峻天皇三年に出家した徳齊法師(二一・181)などの例がある。徳齊法師は、「深信<sub>三</sub>佛法、修行不<sub>レ</sub>懈。」(二〇・113)

という伝えのある司馬達等の子であり、出家以前、用明天皇が瘡をわずらった折には、「奉<sub>ミ</sub>為天皇<sub>ニ</sub>、出家修道、又奉<sub>ミ</sub>造<sub>ミ</sub>丈六佛像及寺<sub>ヲ</sub>。」(二一・124)と申し出て天皇を「悲慟」させた人物でもある。「法師」をとまなう僧は、あとわずかに豊国法師(二一・123)を残すにすぎない。この僧に関する記述を見るに、用明天皇が病を得て三宝に帰依することを群臣に議<sub>ハカ</sub>せたところ、崇仏となえる蘇我馬子がこれを示持したのをうけて、皇弟皇子がくだんの法師を内裏に引き入れたと伝える。この一件に徴する限りでも、これまた枢要な立場にあった高僧とみて誤りないはずである。

こうして「法師」を下接した僧侶をひとわたりみるに、僧界に重きをなしたか、もしくは天皇に厚く用いられたか、あるいはその学徳によって著名であったかなど、ひととおりではないにしても、いずれも尊崇の念おくあたわざる徳の高い僧という点では、一人として例外はない。彼らを文字通り法の師とみなし、その尊崇の念を「法師」を使うことによってあらわしたのであろう。その意味では、それは敬称にも相当する。「沙門」との違いはそこに著しいが、また一方、Ⅱ群の「僧」——当面の問題にそくして言えば、卷二九の「恵妙僧」——と、それが異質であることも、もはや説くまでもない。

ところで、Ⅱ群にも、わずかに一例ではあるが、僧名に「法師」を下接した例がある。次に示す法蔵法師がそれである。

法蔵法師金鐘、献<sub>ミ</sub>白朮煎<sub>ニ</sub>。(二九・380)

白朮の煎たものを献ったというのであるから、右の記述は、このやく一ヶ月半ばかり前に伝える「遣<sub>ミ</sub>百濟僧法蔵・優婆塞益田直金鐘於美濃<sub>ニ</sub>、令<sub>レ</sub>煎<sub>ミ</sub>白朮<sub>ヲ</sub>。因以賜<sub>ミ</sub>絁綿布<sub>ヲ</sub>。」(二九・379)に関連する、そのいわば後日譚とみることができる。法蔵に限って「法師」を下接するについても、それが再出にあたつての表記であるという点を考慮しなければ

ばならない。すなわち、再出であるから、前の記述を踏まえた略述表記が可能であり、また實際、たとえば金鐘のように、その身分や氏姓を示す長い修飾語は表記の經濟という点でも省いた方が合理的であつたはずであるが、とは言え、そうして略述表記するにあつては、法藏・金鐘を、その名前だけで並記することは、両者の身分が違うだけにためられたであらう。法藏は僧侶である。それを示す場合に、Ⅱ群では僧名の上か下のいずれかに「僧」を使う。

「僧」を法藏に上接させると、金鐘まで僧侶であるかのように見誤られかねない。法藏に「僧」を下接させれば、その眞れはないが、しかしそうした場合には、改めて「僧金鐘」と誤読される懸念が生じる。結局、誤解を防ぐために、「法師」を使用する場合の、それを僧名に下接するという通例に倣つたというだけにすぎないであらう。したがって、その「法師」の使用は、ただ「僧」を言いかえただけの便宜的な措置でしかない。

ちなみに、Ⅲ群にも法藏に関する記述があり、それには「賜陰陽博士沙門法藏・道基銀廿兩。」(三〇・413)とある。銀二十兩の下賜は、この記述(持統六年二月条)にすぎだつ五年十二月条にも、医博士や呪禁博士などを対象に行っている。僧侶としてとりたてて天皇の信任を得たというのではないから、法藏には「法師」はむしろふさわしくない。僧侶であることを「沙門」を使ってあらわす、その法藏のあらわし方は、Ⅲ群における通例を破るものではない。論ない。

右のように、仏教關係の記述のなかで、仏教語を使うその使い方、言い換えれば表現それ自体に、Ⅱ群とⅢ群とでは、大きな違いがある。いまそれを要約してみると、僧であることを示す場合に、Ⅱ群では、僧名の下に「僧」を付加する方法が一般的である。対照的に、Ⅲ群では、主として僧名の上に「沙門」を冠する方法による。Ⅲ群には、また「法師」を僧名に下接させた例が少なくない。その使用は、ただ僧侶であることを表示するだけにとどまらず、文



字通り法の師にふさわしい僧侶に限り使い、そうして彼らに対する敬称を兼ねる。Ⅱ群には、この「法師」の使用例は一切ない。

Ⅱ群とⅢ群との違いはかく著しい。しかもそれは、仏教語と非仏教語との別なく、双方の群の、その内部を通じてそれぞれに独自の語の使用、さらには表現のしかたが相互に排他的な異なりを結果しているということにはかならない。もとより、仏教語あるいはそれによる表現を、ことさらに他と区別すべき必然性は全くない。各群それぞれの内部において、それは、全体の記述を成り立たせる語の一つ、また表現の一つでしかない。記述の成りたちという点では、その一つの語、一つの表現は、依拠した資料はもちろんあったはずであるが、必ずしもそのものままではなく、群独自の方法、あるいは方針にそくして、恐らく多くの場合、加除修正や書き改めを経て各記述を成り立たせているものとみなしうる。

ところで、歴史記述の成りたちを辿ってみるに、書き改めなどのいわば記述をかたちづくる作業は、むしろ最終的な段階にあるとみななければならない。それ以前に、資料類を拾捨選択した上で、それらを整理し、歴史の素材とする過程がある。そのそもその素材化の作業においても、Ⅱ群とⅢ群とが、おのおのその基本的な方向を異にしていることは推測に難くない。素材化の作業それ自体を比較することはほとんど望み得ないけれども、その作業は、それに続く記述化の作業を経て成り立つ記述の、その内容に結実しているはずであるから、内容の検討を通して、さかのぼって素材化の作業の実態に迫ることは不可能ではない。こうした観点に立って、次節以下には、内容の検討を試みる。

#### 四、Ⅱ群とⅢ群との対立

——読経や講経などの仏教儀礼の場合——

Ⅱ群とⅢ群とでそのあらわす内容に著しい違いがあるのは、仏教関係の記述のなかでも、とりわけ読経・誦経・説経・講経などの、經典の利用にかかわる一連の用例である。それらは、互いに内容を異にするほか、そのもととなる表現や語に至るまで異なる。そこで、まずそれらの語や表現にそくして、Ⅱ群とⅢ群との違いをみる。次に示すのは、Ⅱ群の用例である。

##### Ⅱ群——説経

- (1) 天皇請<sub>ニ</sub>皇太子、令<sub>レ</sub>講<sub>ニ</sub>勝鬘經。三日説<sub>レ</sub>竟之。是歲、皇太子亦講<sub>ニ</sub>法華經於岡本宮。天皇大喜之、播磨国水田百町施<sub>ニ</sub>于皇太子。(二二・148)
- (2) 高麗僧慧慈、聞<sub>ニ</sub>上宮皇太子薨<sub>ニ</sub>以大悲之、為<sub>ニ</sub>皇太子、請<sub>レ</sub>僧而設齋。仍親説<sub>レ</sub>經之日、誓願曰、(二二・160)
- (3) 大設齋。因以請<sub>ニ</sub>惠隱僧、令<sub>レ</sub>説<sub>ニ</sub>无量寿經。(二三・185)
- (4) 遣<sub>ニ</sub>使於四方国、説<sub>ニ</sub>金光明經・仁王經。(二九・343)
- (5) 是日、始説<sub>ニ</sub>金光明經于宮中及諸寺。(二九・353)
- (6) 皇后誓願之大齋、以説<sub>ニ</sub>經於京内諸寺。(二九・359)

(7) 是月、説<sub>レ</sub>金剛般若經於宮中。(二九・380)

(8) 天皇、体不安。因以於<sub>二</sub>川原寺<sub>一</sub>、説<sub>二</sub>藥師經<sub>一</sub>、安<sub>レ</sub>居于宮中。(二九・383)

(9) 是月、諸王臣等、為<sub>二</sub>天皇<sub>一</sub>、造<sub>二</sub>觀音像<sub>一</sub>、則説<sub>二</sub>觀世音經於大官大寺<sub>一</sub>。(三九・385)

説經の用例は右に尽きる。その全てがⅡ群にあり、Ⅲ群には一切ない。説經は、そうした点でまさにⅡ群を特徴づける用例といっても過言ではない。

一方のⅢ群には、その説經に相当する用例として、講經ないし講説經などがある。次に示すのがその全てである。

### Ⅲ群——講經・講説經

(一) 請<sub>二</sub>沙門惠隱於内裏<sub>一</sub>、使<sub>レ</sub>講<sub>二</sub>無量壽經<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>沙門惠資<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>論議者<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>沙門一千<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>作聽衆<sub>一</sub>。丁未、罷<sub>レ</sub>講。(二

五・252)

(二) 詔<sub>二</sub>群臣<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>京内諸寺<sub>一</sub>、勸<sub>レ</sub>講<sub>二</sub>孟蘭盆經<sub>一</sub>、使<sub>レ</sub>報<sub>二</sub>七世父母<sub>一</sub>。(二六・271)

(三) 於<sub>二</sub>内裏<sub>一</sub>、始安居講説。(三〇・405)

(四) 詔、令<sub>二</sub>京師及四畿内<sub>一</sub>、講<sub>二</sub>説金光明經<sub>一</sub>。(三〇・415)

(五) 始講<sub>二</sub>仁王經於百国<sub>一</sub>。四日而畢。(三〇・420)

Ⅱ群の説經とⅢ群の講經ないし講説經と、右のように互いに排他的な対立をみせるなかにあって、Ⅱ群の(1)だけは、そこに異例となる。けれども、その「講」をのちに「説」に言い換えている事実は、Ⅱ群が「説」を専用することとあきらかに照応し、それ自体、むしろ「説」の使用に傾く、Ⅱ群を通して一貫した傾向を強く示唆するであろう。

それにしても、講經と説經との違いを、同じ儀礼をあらわす語の、ただその選択の異なりに過ぎないとみえることは

できない。たとえば、Ⅱ群の(Ⅰ)にしても、そこにもかくもまず講經というのは、それが三日間も続くほどの盛大な内容をもつほか、一定の形式を備えた儀礼であつたからではないか。經を説くという説經とは、儀礼の規模の上でも、違いのあることは否めない。その点、Ⅲ群の用例では、いくつかある講經の、そのいずれもが儀礼としての規模の大きさを如実に物語る。まず(一)であるが、その無量寿經の講經は、六日間にわたつて続く。しかも、惠隱に講經を行わせるにともない、惠資を論議者とし、僧侶一千を作聴衆として参加させてもいる。そうした儀礼のありかたにまで言及してはいないものの、(四)でも、その仁王經の講經は四日間にも及ぶ。そのほか(二)では、群臣に孟蘭盆經の講經を勧めさせているのであるから、これまた盛大な儀礼的性格が色濃い。(三)(四)ともに講説という。その実態は明らかではないが、その安居講説が後に制度的に確立する一方、金光明經の講説にしても、後に盛大な儀礼として史書がしばしば伝えている。<sup>注6</sup> 双方とも持統紀にあるだけに、それらとの関連を辿ることも可能であらう。

右のように、講經や講説經のいずれもが、いちように盛大な儀礼的性格あるいは規模をもつ。しかもそのほとんど全てをⅢ群の用例が占める。まさにそれらは、Ⅲ群を特徴づける用例といつても過言ではないが、翻つて、Ⅱ群を特徴づける説經はどうか。その各用例を逐一検討し、Ⅲ群の講經などと比較する意義は勿論あるけれども、しかしながら、概観する限りでも、そのあらましを知ることが不可能ではない。また具体的に、たとえば同じ無量寿經を使う場合でも、Ⅲ群のその講經が上述(一)のとおり盛大な規模で厳修されているのに対して、Ⅱ群のその説經は、

(3)大設斎。因以請<sub>ニ</sub>惠隱僧<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>説<sub>ニ</sub>无量寿經<sub>一</sub>。

右のように惠隱一人がそれを行うに過ぎない。他の用例も、おおむねこれに準じる。

いずれにしても、Ⅲ群の講經や講説經などは、ただ經を説くというだけの、Ⅱ群に独自の説經とはあきらかに違う。

そしてまた、Ⅱ群との違いという点では一層著しい、すなわち、法会の記述がⅢ群にはある。次に挙げる用例がその全てであるが、Ⅱ群には該当する例が一切ない。

。經宮佛殿於宅東方、安置彌勒石像。屈請三尼、大会設齋。(二〇・113)

。蘇我大臣馬子宿禰、起塔於大野丘北、大会設齋。(二〇・114)

。作彌山像於飛鳥寺西、且設孟蘭盆會。(二六・264)

。有司奉勅、造一百高座・一百納袈裟、設仁王般若之會。(二六・273)

。奉為天淳中原瀛真人天皇、設無遮大会於五寺、大官・飛鳥・川原・小墾田・豐浦・坂田。(三〇・393)——無遮大会は、このほか薬師寺(同・396)・内裏(同・419・420の二度)・春宮(同・427)でも行われる。

。公卿百寮、設開佛眼會於薬師寺。(三〇・428)

右のように、Ⅲ群に独自の法会に孟蘭盆(盆)會、仁王般若會、無遮大会、開眼會などがある。それらは、儀礼の規模や威儀などにおいても、通常の仏會とは違いがある。

まず孟蘭盆會をみるに、通常のそれを書紀は伝えない。わずかに関連して言及するなかに「此冠者、大会、饗客、四月七月齋時、所着焉。」(二五・242)とあり、「七月齋」は孟蘭盆會にあたるが、それを「齋」であらわすにすぎない。くだんの例は、須弥山像を飛鳥寺の西に作ったことに関連して同所で営まれたもので、その点を勘案しても、もとより通常の孟蘭盆會ではない。ことに飛鳥寺の西は、大化改新に際して天皇、皇祖母尊、皇太子が群臣をあつめて盟ったほか、のちには、多祢島人(天武六年二月)、蝦夷(持統二年十二月)などを饗したと伝えるなど、晴の儀礼にゆかりの深い場所である。ここで須弥山像の造作にともない孟蘭盆會を営むというのであるから、その盛儀のほど

は祭するに余りある。ちなみに、恐らく同じ飛鳥寺の西であろうが、同日の暮には、親貨選人を饗したと伝える。

仁王般若会にしても、この場合には、有司が勅を奉じて百の高座、百納袈裟を作るといふ、特別な用意を伴う。仁王経にちなむとはいへ、そのように用意した上で行う以上、それ相應の盛大な儀礼的規模をもつことは疑いを容れない。またあるいは、天武天皇の菩提を弔うという、同様の目的による法会でも、たとえば「設<sub>レ</sub>国忌齋於京師諸寺」(三〇・395)や「詔曰、自<sub>レ</sub>今以後、毎<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>国忌日<sub>一</sub>、要<sub>レ</sub>須<sub>二</sub>齋也<sub>一</sub>」(同396)などの一般寺院でも行なう「齋」と、内裏や春宮をはじめ特定寺院等で厳修される無遮大会とは、その内容に大きな隔りがあったに相違ない。そして、右に一括して挙げた法会の始めの二例についても、その詳細については明らかでないものの、仏殿や塔の建立にとまなう、おそらくその落慶法要のための盛大な儀礼であることを示す上で、とくに「大会設齋」とあらわしたのであらう。

かくして、Ⅲ群では、「齋」ないし「設齋」とだけいふ仏会のほかに、数の上ではそれをいくぶん上回る数の、盛大な規模・壮重な威儀を備えた法会を伝える。二つの法会を、いま仮りに「設齋」と「設会」というようにあらわした場合に、Ⅱ群には、その後者の「設会」に相当する例がない。<sup>注7</sup>一方また、Ⅱ群とⅢ群とに互いに排他的にあらわれる説経と講経とは、儀礼的性格あるいはその規模に違いがある。二つながらⅡ群とⅢ群とで大きく異なるその儀礼の違いを、それをあらわす表現上の異なりに帰することはもはや妥当ではない。儀礼のあり方そのものにかかわる違い、これがⅡ群とⅢ群との相違の本質であって、表現上の異なりは、主には、そうした相異なる儀礼のあり方をあらわしたその結果であつたろう。その相違をここに集約していえば、すなわち、Ⅲ群は、講経や講説経さらに「設会」の一群などの、その規模や威儀などにおいてとりわけ盛大な儀礼のあり方を示すといった、それらいずれにも共通する点に特徴があり、相対的に地味な儀礼のあり方におおむね終始するⅡ群と対立し、互いにそのあらわれを異にするとい

うことにほかならない。

## 五、おわりに

——続稿へのはしわたし——

以上、仏教関係の記述の、わずかに一部の語や表現の限り、内容に至っては、仏教儀礼のそのあり方についてだけ検討を試みたに過ぎない。検討自体もとうてい十分とはいえないが、それでも、明らかにしえた点がいくつかある。それらは、あらかし次のようにまとめることができる。

すなわち、まずⅡ群とⅢ群とがおのおの単位的なまとまりを成し、そのそれぞれの内部では、記述そのものに限れば、仏教にかかわると否との別がないこと、その成りたちという点では、仏教関係の記述にしても、各群それぞれの記述一般に通じる独自の方針をもとに、恐らく多くの場合——原理的には全て——編述する者の手（刀筆）を経て成りたっているということ。その仏教関係の記述は、必然的に、内容の上でも群ごとにそれぞれ独自な特徴をもち、しかもそれが群相互にきわだった違いをみせるということ。

もとより、検討をはじめて、まだほんの緒についた程度でしかない。とりわけ内容については、たとえば儀礼に限っても、なお解明すべき問題が少なくない。儀礼のあり方の、上述の盛大とか地味とかのその特徴は、そもそも何によるのか。さし当ってそうした問題があるほか、仏教関係の記述の、その全体を通しての特質を見きわめることも課

題となるであろう。その課題への取りくみは、Ⅱ群とⅢ群とが仏教関係の記述をおのおの独自に成りたさせていることに伴い、やがて、歴史形成にかかわるそれぞれの群の特徴を探ることにおのずから繋がるはずである。

右のいずれの問題も、書紀の成りたちを考えるというこの稿の論題に密接なかわりをもつが、その検討は、この稿をひきつぐ続稿に譲る。最後に、その続稿での検討の便宜をはかり、これまでに取りあげた儀礼の用例を、ひととおり整理した上でまとめておく。次の表がそれである。

群		Ⅱ	Ⅲ
説経	二二(2)・二三(1)・二九(6)	(計)	9
講経	二二(2)	二五(1)・二六(1)・三〇(3)	5
設会		二〇(2)・二六(2)・三〇(6)	10

〔注〕

- 1 「日本書紀の敬語」〔『佛教大學研究紀要』通卷第六十八号〕のほか、その注①および④にも、関連する拙稿をいくつか挙げている。
- 2 引用のさいには、もっぱら新訂増補国史大系『日本書紀』前・後篇の本文を使用した<sup>1</sup>が、ときに日本古典文学大系『日本書紀』上・下の本文に従う箇所もある。その間の異同を含め、本文そのものに異同がある場合は、それが行論上必要であると判断したものに限って、注に若干の説明を加えた。なお、漢数字は書紀の巻次を、また算用数字は国史大系本の頁数をそれぞれあらわす。
- 3 この「僧」について、国史大系本にはなら<sup>2</sup>注記がない。一方、古典文学大系本には、北野本・伊勢本・内閣文庫本の諸本がそれを欠くと注する。両大系本ともそれをあらわすので、それに従う。Ⅱ群の特徴としても、そうあって然るべきところ。
- 4 たとえば、次の題詞と歌との双方にその具体例がある。



戲噺、僧歌一首、法師等之餐の刺り杭、馬繫ぎ、いたくな引きそ、僧半甘（三八四六）

法師報歌一首、檀越や、然もな言ひそ、五十戸長が、課役徴らば、汝もなかむ（三八四七）

5 十師を列挙するなかにあつて、ここは、狛大法師だけで一人とするか、次の福亮まで含めて一人とみるか、説が分かれる。国史大系本は後者の説、一方、古典文学大系本は前者の立場になつた。なおまたこの問題に言及して、たとえば田村圓澄氏は前者の見方（『飛鳥仏教史研究』64頁）、仲野浩氏は後者の見方（『大化改新と仏教についての二、三の問題』坂本太郎博士還暦記念会編『日本古代史論集』上巻）をとる。かく見解は異なるけれども、Ⅲ群の通例にかんがみて、「法師」は僧名に上接させないはずであるから、ここでは、狛大法師で一人とみなす。

6 安居の初出例は、天武天皇十二年七月条に伝える「是夏、始請僧尼、安<sub>レ</sub>居于宮中。」（二九・368）で、これと同じ記述が同天皇十四年四月条にも「始請僧尼、安<sub>レ</sub>居于宮中。」（同・377）とある。天武紀の例では、いずれも安居ということとどまる。日本古典文学大系書紀の頭注では、右の初出例について「延喜文蕃式では毎年四月十五日から七月十五日までの間、講説を行なうこととなっている。」という。持統紀の当面の例は、講説を行うことにまで言及したもので、その注は、むしろ持統紀の例にふさわしい。なおまた金光明經の講説については、それを「京師及四畿内」で行つたというが、続日本紀（大宝二年十二月十三日条）によれば、持統天皇の危篤のおりに行つた法会も金光明經の講説であり、しかもそれを「四畿内」に命じている。ちなみに、その講経は、「大<sub>ニ</sub>救天下。度<sub>ニ</sub>一百人出家」にともなう。

7 Ⅱ群では、「設齋」にともなつて説経を行つたという例が二つ（Ⅱ群の説経の用例のうちの②③。52頁参照）ある。説経まで含めると、「大設<sub>ニ</sub>齋於飛鳥寺、以誦<sub>ニ</sub>一切經<sub>一</sub>」（二九・345）が類例となり、つごう八例ある「設齋」のうち、三例までが、それが説経か説経かを示していることになる。Ⅲ群には、そうした例が一切なく、五例あるその全てが、たとえば「皇祖母尊、請<sub>ニ</sub>十師等、設齋。」（二五・251）のようにそれだけをあらわすに過ぎない。ここにも、Ⅱ群とⅢ群との著しい違いがある。

8 「日本書紀の成りたちを考える——仏教関係の記述をめぐって、その二——」『佛教大学大学院研究紀要』第十四号